# 日本留学と日本人教習

## ——一九一〇年代を中心に——

傅　澤　玲

### はじめに

中国人の日本留学は一八九六年から始まり、二〇世紀初頭の十年間、空前の規模に達した。それはまるで川の流れのように、最初はほそぼそと流れていったものが、次第に大きな河となり、そして、巨大な勢いで海に流れ込んでいった。こうして、この時期多くの中国人が祖国を後にした。その一方で、数多くの日本人も教習（教師）として招かれ中国に行った。人が自らの住み慣れたところを離れ、未知の世界に赴くという行動を取らせる、その背後には必ずそれを生み出す特定の時代状況、社会の雰囲気が存在する。この留学発生期における時代の雰囲気を把握することは、中国人の日本留学を的確に理解することができる有効な方法だと思われる。実際、中国の近代教育や日本留学史の問題はすでに、実藤恵秀を始め、阿部洋や汪向栄や厳安生などの学者によって研究されている。いずれの研究も豊富で貴重な資料に裏付けられた、詳細なものである。

この小論においては、私は、先行の研究を、当時日本の一般雑誌『成功』（一九〇二～一九一六）及び中国の教育、文学史に名を残した蒋夢麟（一八八六～一九六三）、胡適（一八九一～一九六二）郭沫若（一八九二～一九七七）の自伝や回想記と結び合わせ、当時の中国人日本留学と中国に渡った日本人教習について見てゆきたいと思う。『成功』雑誌には日本人教習、中国人留学生に関する記事は多くはないが、断片的に載っている。このような文章からある程度当時の日本人教師の状況を推測することができると思われる。また、蒋夢麟、胡

適、郭沫若はほぼ同時代の人で、二〇世紀の初頭は、小学生、中学生の時期に当たった。前の二人は後にアメリカへ留学したが、郭沫若は四川省楽山縣に生まれ、一九一四年来日し、一高の特設予科、六高を経て、九州大学医学部に入学した。彼らの自伝や回想を通じて、近代教育の初期に当時の中国青年は何を体験したのか、何を見たのかを窺い知ることができるだろう。なお、先行研究のきわめて多い分野であるだけに、本論文でも多くの先達の成果を援用させていただくことになった。中国人の日本留学、中国に招聘された日本人教習に興味を持つ人間として、私はそれらを参照しつつ、自ら集めたいくつかの資料をこれに加えて、簡潔に纏めることをこの論文での目的とした。よって、必ずしも本格的な留学研究とは言えないが、従来の研究の概略を伝えることができるならば、本論文の目的は達成される。

## 教育の改革と留学

ここでは、日本留学という問題を考える前に、まず当時の中国情勢と教育改革の流れを述べておきたい。

アヘン戦争後、西欧列強は新式の銃や砲を携え、弱体化している中華帝国を打ち負かした。こうした、たび重なる外圧、不平等条約のくびきのもとでは、次第に中国の体制内部の開明派官僚は変革の必要を感じるようになっていった。彼らは「富国強兵」というスローガンを掲げ、洋務運動を盛んに行なった。洋務とは西洋的実務のことだが、具体的には科学を指している。富国のために、西洋から軍事・工業技術を導入し、国内産業を起こし、西洋の知識や技術を学び、西洋を制せよと呼び掛けたのである。こうした、「富国強兵」策を実行するには、近代技術及び知識を身につけた人材が是非とも必要だった。しかし、旧来の中国の教育制度は、洋務に通暁する人材を生まなかった。また科挙による選抜方式も、時代に適う人材を選び出すことが出来なかった。そこで、政府は洋務を具体化してゆくため、国内で新式の学堂（例えば、京師同文館、福州船政局など）を開設し、西洋知識を授け、また一方で、先進的な文明国へ留学生を派遣することを企てた。

こうして、中国の留学生計画は始まった。しかし日本について見ると、当初日本へ送られた留学生はまったくなかったし、またその計画もなかった。その原因は当時の中国人の心のなかでは、日本は東洋にある小さな一島国にすぎなかったからである。明治維新後、日本は積極的に西洋文明を取り入れ、わずか数十年の内、国力が増大した。にもかかわらず、当時の中国の支配階級あるいは士大夫は心理上では、日本文化は中国から伝わったものであり、日本人が中国文化を学ぶことは有っても、逆はありえないと考えたのだった。日本に学ぶ必要がないから、日本へ留学生を送る計画がないのも当た

り前であった。

ところで、ここに大きな転機が訪れた。それは日清戦争で、東洋の小国日本が大中華帝国に勝利したのである。これは中国人に自らの洋務運動の敗北を認めさせただけでなく、中国人の日本人観を一変させた戦争でもあった。体制側の有識者達はようやく日本の西洋文化の摂取と努力が国力の強大をもたらしたと認識しはじめた。こうして日本留学問題が現実問題として、クローズアップされてきた。一八九六年、駐日公使裕庚が一三人の官費留学生を日本へ連れてきた。彼は一三人の学生の教育を、当時日本外務兼文部大臣だった西園寺公望に依頼、西園寺は高等師範学校長の嘉納治五郎（一八六〇～一九三八）にこれを委託した。これが中国人日本留学のはじまりである。だが、この時を境に、留学生が一気に増えたわけではなく、本格的な留学が始まるのには、もう少し時間が必要であった。

一八九八年、列強の中国分割の動きが加速化し、このような危機状況のなかで、中国を抜本的に改革することが不可欠だとする変法自強運動が盛んに展開されることになった。この運動を指導したのは康有爲と梁啓超であった。彼らは、欧米諸国の富強の理由は単に機械や兵器がすぐれているからではなく、その根底に盛んな学問研究や教育の普及があるからだとして、「変法」と平行して「興学」の必要性を主張した。これは具体的に、実際生活から遊離して役に立たなくなっている科挙制度や古教育を抜本的に改革するとともに、諸外国、ことに日本をモデルとして、全国のいたるところに近代学校を設置し、また各地に図書館、新聞舘をつくり、外国図書を翻訳して、さらに西洋の近代的な学問技術を深く研究すべきことを勧め、また西学の人材を早急に養成するために、海外、ことに日本に留学生を派遣することを強調した。こういった運動はいくつかの本によって、その理論的な根拠を与えられるべく説明が試みられている。例えばこの年、厳復（一八五三～一九二一）はハックスリーの『進化と論理』を『天演論』と題して翻訳出版した。その中に提示された「生存競争」「自然淘汰」の考え方は、当時の中国のおかれた国際的な地位を巧みに説明していた。すなわち、弱肉強食の世界のなかにあって、もし中国が旧制度を改革し、西洋近代の政治・社会制度を学び、新式の学校制度を導入し、かつ新時代に適応する努力をしないならば、必ず「優勝劣敗」の法則によって淘汰されてしまうということである。

また、この年、清末の教育改革者張之洞（一八三七～一九〇九）が「勧学篇」を世に送った。彼は「中学を体となし、西学を用となす」という、いわゆる「中体西用」論の立場に立って、西学に対して一定の理解を示した。この日本留学の宣言書と言われた「勧学篇」のなかで、張之洞は学堂の組織的

導入による近代教育の普及や、外国書籍の翻訳を盛んに行なうよう提唱していた。そして結論的に、日本への留学生派遣を勧めたのである。

「洋行の一年は読書五年にまさり、海外学堂の一年は国内学堂での勉学の三年にまさる…遊学の国に至っては、西洋は東洋に如かず…」

張之洞が日本留学を推奨する理由を要約すると、大体次のようである。まず、日本と中国とは距離が近く、交通費がかからないので、多くの人を派遣できる。次に、風俗習慣も似ており、文化的にも近いので、比較考察が容易である。また、日本語は中国語に近いので、覚えやすい。そしてに日本はすでに西洋の重要な学問をあらまし消化しているため、中国が西洋の学問を学ぶ場合、さしあたり日本のこなしている西洋文化を習えば、直接西洋に学ぶよりも半分の時間で倍以上の効果を上げることができる。「勧学篇」は時の皇帝から勅命を得て、各地方に頒布され、百万部も売れたと言われる（阿部洋　一九九〇年　五五ページ）。

以上は中国の近代教育の導入と日本留学の発生に関しての歴史のくだりである。このように、中国を列強から救おうとする有識者達は元来の教育を改革して、近代文明に相応しい人材を育てようとしたのである。

ところで、こうした教育改革の流れは一九〇五年の科挙廃止によって決定的となる。一九〇四年皇帝臨席のもとに行なわれる「殿試」を最後に、科挙試験は千三百年あまりの歴史を閉じた。翌年の一九〇五年九月には、清朝は科挙の廃止を正式に布告し、これに伴って、この年の一二月中央教育行政機関・学部が成立した。省に提学使司、県に勧学所を設置され、これらの役所が学堂開設の督励にあたった。

後に北京大学の学長になった蔣夢麟は彼の自伝の中に、科挙の廃止について次のように書いている。「科挙を廃止する紹書は日本がロシアに勝ったという事実に促されたのだ。科挙の代わりに、日本をモデルにした教育が導入された。」（蔣夢麟　一九九二年　八〇ページ）

蔣の指摘した日露戦争は一九〇四年に始まっている。当時の中国の新聞は非常な関心をもってこの戦争を報道した。これは日本に対する関心が庶民感情の上でも非常に高まっていたことを示している。この年、胡適は田舎から上海の学堂に進学し、ある日の作文の授業で「日本はなぜ強くなったか」という題目が与えられたことを記憶している（胡適『四十自叙』）。これなどは中国人の日本に対する姿勢の変化を如実に示しているといえよう。

こうした、日露戦争での日本の勝利は、同じアジア人としての中国の人達にも、ある種の自信と自負心を抱かせたに相違なく、次の蔣夢麟の文にもそれがよく現われている。一九

〇七年の夏休み、蔣夢麟は従兄の勧めで、日本を旅行した。彼は上野の展示会に数十回足を運び、日本の工業の発展に深い印象を受けた。彼は次のような感想を書いている。「私は日本について良い印象を得た。国の全体は公園のようで、人々の身なりはきちんとしていて、都市は清潔である。彼らは心のなかで、高い誇りを持っているかもしれないが、お客さんを丁寧に扱う。義務教育のおかげで、国民の一般的な教育水準は中国より遥かに高い。これが日本を世界の強国にならせた秘密だろう。これは私の一ヵ月の日本滞在後の印象である。後に（一九〇八年）私はアメリカに留学し、教育学を専攻した。それはこの（日本旅行の）感想に基づいている。」（蔣夢麟　前掲書　八四ページ）当時の中国人は確かに日本に奮い立たれされたのである。

## 日本留学の広がり

すでに述べたように中国人の日本留学は一八九六年に始まった。しかし、初めはそれほど盛んではなく、科挙廃止の前年をみると、留学生の数は一三〇〇人足らずであった。ところが、一九〇五年には留学生数は一挙に八〇〇〇人となり、一九〇六年には一三〇〇〇～一四〇〇〇人とも、二〇〇〇〇人とも言われる程の人数に登ったという（実藤恵秀　一九七〇年　一五ページ）。このような留学生数の増加は中国政府の人材養成策や、前述した日露戦争で黄色人種の日本が白人のロシアに勝ったという「驚愕」的な結果と深くかかわっている。日本は中国の学ぶべき対象となっていたのである。

後に日本留学を経て、中国の文壇で大いに活躍していた郭沫若が『わが幼少年時代』のなかで、その時の自分の気持ちを次のように記している。「そのころ外国留学熱が広がりつつあった。欧米に対して私が大きな憧憬を持ち始めていたのはいうまでもない。しかし、これはとうてい実現困難だった。長兄はもう日本に行っており、また五兄も私が中学にはいった時に、武備学堂を卒業して日本に実習に派遣されていた。そこもあこがれの土地だった。日本へ行くのがだめなら北京・上海へ行きたい。それもだめなら、せめて省都（成都）へ行こう」と（郭沫若　一九六二年　七一ページ）。郭の回想から、当時の中国の若い世代が新しい教育に目覚め始めた様子が窺える。つまり郷里の学校（彼は当時田舎の町の中学校に進学したばかり）での教育には満足することができず、大都会や、外国へ行って新しい学問を身につけたいという焦燥感が読み取れるのである。ちなみに、武備学堂は一九〇三年成都に成立した学校である。その中には何人かの日本武官が教習として勤めていた、と当時中国にいた日本人は述べている（城山三峡　一九〇七年　三七ページ）。このような日本人教習の存在は留学をさらに加熱したと思われる。学生が彼らの授業や

話から日本の教育事情を知り、留学意欲を掻きたてられたことは想像に難くない。これについては後に述べることにする。

ところで、日本に殺到した留学生はどのような人達だったのだろうか。松本亀次郎（一八六六～一九四五）によれば、怒涛のように押し寄せた留学生の中には、官費留学生だけでなく、自費で旅費を準備した留学生や、旅行者もいた。兄弟姉妹、夫婦親子と一家揃って海を渡ったものもあれば、一三、四歳の子供から七、八〇歳の老人までであったという。しかも、留学生の学力や志望もそれぞれ異なっていた。宏文学院長をした嘉納治五郎は次のように述べている。「普通学の出来ぬ者も来れば、四〇、五〇以上の老人も来る。地方の紳士も来れば、翰林院の学士も来る。…汽車旅行的に手取り早く日本の文物を視て帰り度い者、普通学から入って専門学を修め度い者、教育に志す者、軍人に志す者、士、農、工、商雑然たる有様を呈したものだ。」（嘉納治五郎　一九〇六年　七～八ページ）この二つの叙述から、当時の中国の人々の認識では、留学とは若い世代の特権ではなく、すべての人が体験できることだったのではないか、と思われる。

## 日本人教習及び日本人が作った学校について

中国留学生が大挙して日本に押し寄せたころ、数多くの日本人が教師として招かれ中国に渡った。今世紀の最初の一〇年間、多くの日本人教師は中国政府に招聘された人達であった。実藤恵秀によると、一時期その数は六〇〇名にも達するほどの盛況ぶりであった（実藤恵秀　前掲書　九三ページ）。こうした日本人教師の増加は当時の中国の教育事情と無縁ではない。ここでは、まずこの原因から見てゆきたい。

科挙廃止に先立って、一九〇一年から政府は従来の書院を新式の学校（洋学堂）に改組し、京師大学堂（一八九八年に発足したが、義和団事件で閉鎖された）を再開し、諸外国、特に日本の制度を参考にして作成した「欽定学堂章程」（一九〇二年）を発布した。また、各省に対し、学生を選抜して、海外、ことに日本に留学生を派遣するよう命令した。こうして、教育改革が進められ、これを平行して学堂の建設が着々と進められていった。このように器についての整備は順調に進められていった。しかし、中身となる、いわゆる新教育を支える教師の不足が問題となった。とりわけ理科、工科、地理担当の教師の不足は深刻であった。確かに留学生を海外に送って、速成教育を受けさせることは教師の養成方法の一つに違いなかったが、これは経済的な面でも問題があった上に、外国での短期間の教育によって養成された者が本国の高等教育機関で果たして十分に教授できうるのかどうかという疑問もあった。そこで手っ取り早い手段として、外国人を中国の学校へ教師として招いたのである。

一九〇二年、中国の碩学呉汝綸（一八四〇～一九〇三）は京師大学堂総講習に就任するよう要請された。彼は就任に先立ち日本の教育事情や大学運営を調査するため、六三歳の高齢をおして日本に赴いた。彼は日本に約四ヵ月間滞在し、文部省をはじめ、各官立学校、文化施設を訪問し、教育界の名士と中国の教育改革問題について意見を交換した。そして、この時に正式に日本人教習の招聘を日本の関係者に依頼した。

日本人教習とは、中国に来て教鞭をとった日本籍の教育者を指す言葉である。日本から中国に派遣されてきた者が主であるが、一部に中国にいた日本人居留民であった者、また中国で中国人を対象に経営していた、いくつかの学校で教鞭をとっていた日本籍の教師も含む。蔣夢麟によると、一八九八年、彼が紹興府の中西学堂の生徒だった頃、学校には日本語教師の日本人がいたそうである。ただし、その教師は在中国日本人なのか、日本から招かれたのか、は不明である。

ところで、こうした日本人教習はいつ頃から本格的に中国の学校に登場しはじめたのだろうか。一九〇五年外国語学校の教授をしていた宮島大八は「支那で日本の人材を招聘し始めたのは日清戦役の後である。流石の支那も日清戦役の結果、少しく目を醒まして先づ廣東の同文館から教師一人を求めたいと、日本政府に向かつて依頼してきた、既往幾千年間日本が支那より教師を招いた事はあつても、支那が日本政府に向かつて教師の注文をして来たのは之が抑もの始めである。」と記している（宮島大八　一九〇五年　三三ページ）。宮島大八は当時早稲田大学清国留学部の主事をしていた青柳篤恒（一八七七～一九六一）のかつての先生で、中国の事情に詳しい青柳から、確実な情報を得たのだろう。確かに、中国が周辺の民族から教師を招いたことは、かつてなかったことかもしれない。

ちょうどこの頃、中国の国内の動きに呼応するように、日本では「渡清熱」が起こっていた。中国に居住している日本人は一八九九年には一七二五人程度だったが、一九〇五年には一六九一〇人（東亜同文会編『支那年鑑』による）にはねあがった。中国は日本人の憧れの事業開拓の場所となっていたのである。雑誌『成功』の海外活動欄には中国の教育事情がたびたび報じられている。一九〇四年一月号の『成功』誌の臨時付録の「満韓事業案内」には、次のような勧めがある。「日本人が渡清は商業に於いても、農業に於いても、工業に於いても、教育に於いても、其他凡ての方面に於いて中々有望の事と思う」、「日本人は教育家としての渡清は有望である」。つまり、商業、農業、工業と並んで、教育も有望な事業とされたのだ。『成功』は「枢要の都会に教科書肆（書店）の開店」を提案した。また、ある投稿者は教育用品の売買を勧め、「現在支那人が最も缺乏を感じて居る物は何であるかと云ふと、教

育品の如きはたしかに慥に其一であらうと思ふ、図圖の手本とか、図引器械とか、標本とか、體操器械と云ふやうな物は大に缺乏して居る」（木野村政徳　一九〇五年　二五三ページ）と説明した。確かに、近代教育を導入したばかりの中国には教育用品や教科書類の欠乏は大きな問題であった。郭沫若の話によると、彼が中学で使った幾何学は菊地大麓（一八五五～一九一七）の編纂したものであり、物理学は本多光太郎のものであった。このように「日本人が教育家としての渡清は有望である」と勧めた『成功』の誌面には、日本人教習についての具体的な記事も断片的に現われていた。例えば、どの科目の教師が足りないか、給料はどのくらいか、等々。ともかく、日本人教習が有望かつ高給の職業として、渡航希望者に紹介されていたのである。こうした日本での日本人教習の評価も、日本人の増加を後押しした一因であろう。

さて、このような背景の中で誕生した日本人教習であるが、以下では少し見方を変えて日本人によってつくられた学校についても、付け加えて、話を進めてゆきたいと思う。中国で日本人による学校の開設と運営は一八九八年頃から始まり、徐々に増えていった。例えば、「東文学堂」という教育機関は早い段階から中国の主要な都市に広まった。これは中国人に日本語を教えるかたわら、近代諸科学の基礎としての普通学（例えば、地理、世界史、理科等）も授け、中国人に新教育を示すとともに、近代学校のための教員養成の役割をも果たした。当時の日本政府も日本人教習の派遣を重視しており、派遣の人員は、特定の学校や機関の中から選抜しただけでなく、さらに「清韓教員養成所」で短期的な訓練を受けさせた。また中国で中国人を対象に学校を経営することも大いに重視し、援助・指導も積極的に行なっている。これらの学校は個人の名目であっても、実際は政府の指導を受けるか、軍の管理下にあった。（汪向栄　一九九一年　二六二ページ）

一つの例を取ると、中島裁之（一八六九～一九三九）の東文学社はそのタイプの学校の代表であった。彼は熊本県に生まれ、本願寺の学校（現竜谷大学の前身）を出た後、一八九一年に中国に渡り、中国各地をまわった。一八九七年、彼は河北省の保定蓮池書院を主宰していた呉汝綸に師事し、師の依頼により、他の門下生に日本語、英語を教授した。呉汝綸は当時中国の碩学であるだけではなく、李鴻章の幕客でもあった。中島は人脈の広い呉を通して、当時の有力な官僚と知り合うことができた。が、その中で清末のベストセラー『老残遊記』の著者劉鉄雲（一八五七～一九〇九）から一千元の寄付を得、一九〇一年三月北京に東文学社を開設した。中島の『東文学社紀要』によると、この学校は年齢や学歴の制限も、家柄、民族、職業などの規定もなかった。さらに学費を徴収しなかったため、定員を遥かに超える学生が集まった。学

校の最低限度の支出と学校スタッフの月給などの経費はかかったが、中島本人の生活費は自分で工面し、学校からは支給を受けていなかった。では、この学校の運営はどのように維持されていたのか。その後分かったことだが、中島裁之は当時の日本の在清国駐屯部（在天津）から、雑誌の編纂の名目で資金援助を受け、さらに古い友人を通して、駐清国の公使館もしくは日本の外務省から資金援助を得ていた。中島裁之は政府の意図で、学校を設立したわけではなかった。だが、日本政府はこうしたルートを通じて、東文学社を補助したのである。

## 日本人教習、日本に留学した教師

さて、以上のような背景のもとで、中国に渡っていった日本人教習であったが、実際のところ、彼らが与えた影響や普通の中国人達との交流、日本留学の経験者による授業の実態はいったいどういったものであったのだろうか。この章では、その実際を特徴的な例を二、三取り上げ、見て行きたい。ここで特に取り上げるのは郭沫若の回想記である。

郭沫若の「わが幼少年時代」によると、成都の学校ができたばかりのころ、招聘されてきた日本の教習は非常に多かった。そのころ、田舎の蒙学堂では洋式体操（そもそも伝統的な中国の家塾や書院にはこの科目がなかった）が教えられていた。洋式体操自体、中国では珍しいものだったが、中国人にとって、さらに奇妙だったのは体操の時の号令であった。「立正」（中国語）を「立正」と呼ばずに、「キヲツケー」、「向右転」を「ミギムケーミギ」、「向左転」を「ヒダリムケーヒダリ」といい、足をあげて歩き出すと「ヒ、フ、ミ、ヒ、フ、ミ」と呼んだ。体操は日本人教習によって中国の学校に紹介されたのだが、号令は中国語に訳されなった。よって、蒙学堂の生徒はわけが分からなかった。しかし、「これはまったくおもしろいもので、『洋式体操』をする時には、通りにいる人がほとんどみな集まって来て見学したものだった。」（郭沫若前掲書　三二ページ）と郭沫若は記している。当時日本人教習の授業は殆ど通訳つきで行なわれたが、体操、図画、工芸など比較的簡単な科目の場合には通訳を置かず、日本語を使い、手真似で補って授業を行なっていた。上記のような洋式体操の場合もこれにあてはまるといえよう。以上は、当時の授業の一風景であるが日本人教習の伝える一つ一つの物事が大変興味深く受け取られていった様子が伺える。

ところで、当時の日本人教習の中には中国社会に入り、民衆に接近しようとした人も少なくなかった。郭沫若によると、一九〇四年の夏休み、四川の東文学堂で学んでいる彼の長兄は二人の日本人教習と一緒に蛾媚山に遊び、帰りに彼らを郭の家に連れていった。一人は服部操といい、もう一人は河田

喜八郎と言った。汪向栄の「日本教習分布表」によれば、服部操は当時四川省成都の東洋予備学堂の教習であった（汪向栄　前掲書　一一四ページ）。おそらく、服部は仕事のかたわら、東文学堂の授業を兼ねていたから、郭の長兄と知り合ったのだろう。ちなみに、服部は日本に帰った後、『日華大辞典』の編者となり、東京成城学校留学生学部主任にもなって、長い間、中国人の留学生予備教育に従事していた。中国で教習として得た経験及び中国人との生の接触はその後の服部の職業にいかされたと思われる。ところで、郭の家に遊びに来た服部操と河田喜八郎は、郭沫若に日本語を教えたほかに、郭の家族とどんな交流を行なったのだろうか。資料は残されていないが、鄙びた農村の人々にとって、日本人との交流は視野を広げられ、自分の国以外の知識を増す体験だったに違いない。郭沫若は次のように述べている。「日本人が来たことで、私たちの郷里の風習がだいぶ開けてくるようになった。もっとも顕著だったのは父がそれ以来生卵を食べはじめたことだ。これは前には夢にも考えられなかったことなのである。」（郭沫若　前掲書　三三ページ）ちなみに、滞日六年になった筆者はいまだに生たまごを食べられない。郭沫若の父の「変化」は、今の中国人の目から見ても、驚くべきものがある。

このころ、日本に留学した人の中には、国に戻り学校に勤める人が多かった。郭沫若が学んでいた田舎の高等小学校にもそうした教師がいた。例えば、ここに羅という人がいるが、彼は嘉納治五郎の宏文学院を卒業した人で、郭の在籍した高等小学校で数学と物理を教えていた。また一九〇七年郭沫若は中学校に進学しているが、ここでも、教師の内の何人かは日本への留学経験者であった。学監で、国文を担当した者もいたし、地理学を教える者もいた。こうした教師は官費留学生か私費留学生だったのか、また日本で何を専攻したのかなどは郭沫若の文章では明らかでない。だが郭沫若の筆致から、彼らは学生を導けるほどの学殖を持っていなかったような印象を受ける。

当時、日本に渡った中国留学生の多くは官費でも私費でも、速成教育を受けた人が非常に多かった。例えば、留学生の教育機関としてもっとも知られた宏文学院には修業年限三年の普通科と一年程度の速成科という課程が設けられていたが、留学生の大多数は速成科に入学した。この他、速成師範科や警務科には一ヵ年のほか、八ヵ月、六ヵ月の課程も開設された。宏文学院開設後、最初の五年間で卒業生は一九五九人いた。しかしその内、「普通科卒業はわずか一二九人（六・六％）に対して、速成科卒業は一八三〇人と圧倒的多数（九三・四％）を占めていた。しかもこれら速成科卒業生の八割近く（一四一七人）は師範科関係の修了者であった」（阿部洋　前掲書　七七ページ）。郭沫若を教えた教師たちも速成教育を経た者達だっ

たのだろう。短期間で学業を修めた者が果たしてどのくらい学力を有していたのか。ことに語学や理科類はわずか一年あるいは数ヶ月の学習によって身に付けられるものではなかろう。

郭沫若の通った中学校では英語と日本語が教授されている。彼は両方を学んだ。英語の教科書は日本の正則英語学校の教科書だった。日本語の教科書はだれがつくったのか不明であるが、日本語を教える先生は成都の日本留学予備校で一年習っただけで、それほど日本語ができなかったらしい。郭沫若は「私たちは日本語を一、二学期間習ったが、私たちの力の限りをつくして、50音すら身につかなかった」（郭沫若　前掲書　八一ページ）と回想している。

## おわりに

以上見てきたように、近代教育を導入しはじめた頃、ことに科挙による官僚の選抜試験制度が廃止された後、多くの中国人は日本に留学し、そして同じ時期、中国の新式の学校の増加とともに、多くの日本人が教師として雇われた。中国人の日本留学の成果は帰国直後の時点では、それほど高くはなかったかもしれないが、多人数の一斉行動は社会に新風を吹き込み、人々の考えを新たにさせる推進力を用意したに違いない。つまり、日本留学を通じて、中国は近代文明に目醒め、さらに西洋文化の片鱗に触れるきっかけを得ることができたのである。今世紀の二〇年代、新文学運動で大活躍した多くの文学者は日本への留学経験者だった。魯迅、周作人、郁達夫、郭沫若など枚挙にいとまがないほどすぐれた文学者が輩出した。また、近代中国史に名を残した政治及び軍事の指導者もその中に多く名を連ねる。彼らが日本で得た種子は中国で撒かれ、絢爛と花開いたのである。一方日本の場合では、外国人に対する日本語教育が一つの切っ掛けとなって日本語の文法の本格的な研究、日華辞典の編纂なども一段と進んでいった。他方、漢籍から中国を見るのではなく、中国の学校の教師として、日本人教習は実際の中国人の社会に入り込み、一般の民衆と交流し、生の中国を認識することができた。このように日本留学、日本人教習は両民族の前例のない大接触の媒介物であり、日中両国の文化交流の歴史になくてはならない、輝かしい一ページであった。

しかし、服部操らが中国の学生と一緒に山を登り、中国の学生の家族と親しく付き合ったような実に麗しい交流があったのにもかかわらず、留学の高峰期からわずか二〇数年後、日本は中国を侵略する道に踏み切った。この不幸な戦争はどう理解すれば、いいのか。私にとって、今後の課題として残る大きなテーマである。

## 【参考文献】


阿部　洋　一九九〇年『中国の近代教育と明治日本』福村出版株式会社

蒋　夢麟　一九九二年『西潮』遠流出版公司

実藤恵秀　一九七〇年『中国人日本留学史』くろしお出版

郭　沫若　一九六二年「私の幼少年時代」『中国現代文学選集五郭沫若・郁達夫集』松枝茂夫訳平凡社

城山三峡「四川省における有望事業」『成功』一九〇七年四月号成功雑誌社

嘉納治五郎「支那留学生教育学校宏文学院経営譚」『成功』一九〇六年四月号成功雑誌社

宮島向八「支那に於ける日本教師」『成功』一九〇五年三月号成功雑誌社

木野村政徳「支那商工業有益経営法」『成功』一九〇五年五月号成功雑誌社

汪　向栄　一九九一年『清国お雇い日本人』竹内実訳朝日新聞社

胡　適　一九三九年『四十自叙』亜東図書舘